

平成 30 年 6 月 2 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02060

研究課題名(和文) 国家神道と国体論に関する学際的研究 宗教とナショナリズムをめぐる「知」の再検討

研究課題名(英文) Interdisciplinary Study on "Kokka Shinto"(State Shinto) and "Kokutai" Theory :
Reconsideration of Knowledge Concerning Religion and Nationalism in Modern Japan

研究代表者

藤田 大誠 (Fujita, Hiromasa)

國學院大學・人間開発学部・教授

研究者番号：20407175

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本共同研究では、近代日本における宗教とナショナリズムをめぐる「知」の実態に関する討議の場を20回に亘って設け、多種多様な研究分野の研究者が集う「学際的アリーナ」の基盤を築いた。

近代日本社会における「国家理念」の探究、並びに「神道」と「国体論」が交錯する問題群を検討する中で、個別具体的な実証的歴史研究の積み重ねと包括的比較を通して、その一般性と特殊性を慎重に見出すことの重要性とその戦略的有効性が確認された。

研究成果の概要(英文)：In this collaborative research, we set up 20 opportunities to discuss the actual state of knowledge about religion and nationalism in modern Japan, and gathered researchers in various research fields and laid the foundation for "interdisciplinary arena."

In the course of exploring the "national philosophy" in modern Japanese society and considering a group of problems in which "Shinto" and "Kokutai" Theory interlace, through the accumulation and comprehensive comparison of individual concrete empirical historical research, the importance of finding out its generality and specialty carefully and its strategic effectiveness were confirmed.

研究分野：近代神道史、国学、日本教育史・体育史

キーワード：国家神道 国体論 宗教 ナショナリズム 神道 学際的アリーナ 神社 日本主義

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来、「国家神道」研究と「国体論」研究は、いずれも近代日本の宗教とナショナリズムに関わる重要な主題として捉えられてきたが、一見近接しているかのような両研究主題は、意外なことに必ずしも深い交渉を持たないまま、各々固有の文脈を以て別個に展開してきた。つまり、一方の「国家神道」研究は、専ら近代神道史や日本近代史の立場から精緻な「制度」史的研究を軸に考察が深められ、他方の「国体論」研究では、日本思想史や日本教育史を中心に「思想」史的研究が積み重ねられてきたのであるが、相互の研究成果を有機的に接続して日本の近代の実態やその特質を実証的かつ総合的に描こうとする本格的な研究は、長い間試みられて来なかったのである。

(2) しかし近年、各研究分野において、両主題の研究成果を意識的に接続して新機軸を打ち出そうとする研究者たちが続々と現れている。まず、本研究の代表者で近代神道史・国学の藤田大誠は、「国家神道」研究の成果を踏まえつつ、「国体」理解の総合的学問としての「近代国学」や「公共空間」としての神社という視座を提示し、近代日本国家、神社神道、国学、皇室、慰霊、仏教、教育の相互関係に着目して制度史的・思想史的研究を積み重ねている。また、日本近代法史・憲法・宗教社会学の小島伸之は、従前「国家神道」と関連を持ち「国体」に対する異端取締と位置付けられてきた特高警察の新宗教弾圧について再検討し、従来説に批判を加えている。さらに、「国家神道」研究という狭い領分に囚われない「国家と宗教」研究への移行を夙に提唱し、重要な先行業績を残してきた日本近代史の山口輝臣は近年、主に「国体論」と仏教との関係に注目して研究を進めている。そして、現在の「国体論」研究をリードしている近代日本思想史の昆野伸幸も近年、神道的国体論・日本主義と「国家神道」との関わりを積極的に検討している。

(3) 藤田は、かかる研究者たちの問題意識が近接しているにも拘らず、専攻の差異が壁となって相互の研究交流を欠き、さらなる「化学反応」を妨げていることを残念に思っていた。それ故近年、神道史、宗教史、都市史、地域史などを架橋した「帝都東京における神社境内と「公共空間」に関する基礎的研究」(H22~24、基盤研究(C)(一般) 研究代表者：藤田大誠)を主導するとともに、宗教社会学、神道史、近代史、法史、思想史などを架橋した「近現代日本の宗教とナショナリズム 国家神道論を軸にした学際的総合検討の試み」(H23~25、基盤研究(C)(一般) 研究代表者：小島伸之)にも連携研究者として参加する中で、本研究の研究分担者や連携研究者、研究協力者となっている多様な専攻分野の研究者たちと研究交流を深め、

多数の成果を挙げてきた。

(4) 斯様な学術的背景を踏まえ、本研究では、両科研と「国体と仏教 - 日本近代史における仏教の再定位に向けて」(H24~26、基盤研究(C)(一般) 研究代表者：山口輝臣)の成果を発展させ、「国家神道」研究と「国体論」研究を有機的に接合して新たな議論の方向性を提出するために、最前線の知見を総合し忌憚のない議論の場を構築すべく、学際的研究組織を立ち上げたのである。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、近代日本の宗教とナショナリズムをめぐる「知」の実態(様々な担い手による信仰・思想・学問構想とその現実)に関する学際的再検討を行うことにより、これまで各々別個に展開してきた「国家神道」研究と「国体論」研究を有機的に接合し、近代日本宗教史に関する学際的アリーナ(討議場)の構築と当該主題における新たな議論の方向性を提出することを目的とする。

(2) 具体的には、神道・国学や「右翼在野神道」の関係者を中心に、仏教、キリスト教、新宗教、学校教育等の担い手による「神道的国体論」関連出版物の調査・検討を行うとともに、「国家神道」や「国体論」に関する重要な業績を持つ諸専攻の研究者で構成される学際的研究組織を立ち上げて研究会を積み重ね、その成果を公開シンポジウムや報告書刊行によって広く発信する。

(3) 要するに本研究は、「国家神道」研究と「国体論」研究の両主題を架橋するために、近代日本の宗教とナショナリズムをめぐる「知」の実態解明(様々な担い手による信仰・思想・学問構想とその現実に関する史的検討)という課題を設定し、かかる「知」の担い手たちの思想と行動を検討対象とすることによって、あくまでも具体的な史料の検討に基づく実証的歴史研究を軸とした学際的再検討を試みるものである。

3. 研究の方法

(1) 研究計画・方法の柱は、「神道的国体論」関係史料の調査蒐集・検討、学際的アリーナ(討議場)としての全体研究会の開催と研究発信である。

國學院大學所属メンバーを軸とする「国家神道・国体論研究会」を組織して、「神道的国体論」に関わる神道・国学系人物や団体の出版物(書籍、雑誌)の調査蒐集・検討を行い、また、他機関所属メンバーと協力して、仏教、キリスト教、新宗教、学校教育等の担い手による「神道的国体論」をも調査・検討し、「神道的国体論関係文献目録・解題」を作成する。

学際的研究組織を立ち上げて各メンバーが事例研究に取り組み、次年度まで各二回開催する「宗教とナショナリズム研究会」で「国家神道」研究と「国体論」研究を接合すべく議論を積み重ね、最終年度には公開シンポジウムや報告書刊行によって広く研究発信を行う。

(2) 國學院大學を「中核研究拠点」として研究代表者の藤田大誠が全体を統括し、研究分担者と協力しつつ、連携研究者・研究協力者の旅費等支出に関するマネジメント及び「国家神道・国体論研究会」と「宗教とナショナリズム研究会」の運営、公開シンポジウム開催、研究発信、報告書作成の実施を行う。

4. 研究成果

(1) 当初、本共同研究においては、「神道的国体論」関係史料の調査蒐集・検討、学際的アリーナ(討議場)としての全体研究会の開催と研究発信の二本柱による研究計画を立てていたが、研究を推進するに当たって、総勢25名から成る大所帯の研究組織のもと、出来る限り円滑に研究を進め、実質的な成果を獲得するために、聊かの軌道修正を行いつつ展開してきた。

(2) その大きな方針修正としては、当初構想していた「神道的国体論関係文献目録・解題」について、平成二十八年度の段階で本共同研究メンバー各自が最終的に作成する論文にかかる要素を盛り込むことにしたこと、さらには、國學院大學内部で完結することを想定していた「国家神道・国体論研究会」について、第五回研究会より原則として公開研究会へと移行したことが挙げられる。

(3) 本共同研究に参画したメンバーは、20~40代の若手・中堅研究者で占められていたため、いずれも年間を通して極度の繁忙状態にあり、研究代表者としては、それぞれの問題関心からなるべく自由に取り組む中で自然と膨大な「神道的国体論」関連文献の提示や実質的な書籍解題に繋がるように促す方が生産的な方法であり、さらには外部に開いた公開研究会の形式とした方が、メンバー間における過剰な義務感を軽減することに繋がるであろうと判断した。かかる聊か消極的な判断に基づく方針修正であったが、結果的に見れば、本共同研究の課題に即した多くの研究成果が得られ、また、各研究会においても、多様な参加者が増え、より学際性豊かな議論に繋がった面もあったといえよう。

(4) 終わってみれば、2年半足らずの間に、国家神道・国体論研究会が12回、宗教とナショナリズム研究会が4回、本共同研究主催の学会テーマセッション・パネルが2回、共催シンポジウムが一回、関連シンポジウムが1回、計20回という、それなりに多くの

討議の場を提供することが出来た。

(5) この中で、神道史、宗教史、日本近代史、地域社会史、日本思想史、教育史、体育・スポーツ史、政治学、法学、民俗学、社会学など、多種多様な研究分野の研究者が集う場を可能な限り設けたことは、当初目標に掲げていた「近代日本宗教史に関する学際的アリーナ(討議場)」の構築とは言えないまでも、その土台程度は作ることが出来たのではなからうか。また、本共同研究の主題である「国家神道」研究と「国体論」研究を接合した議論の必要性という意識付けだけは外部に対して出来たのでは無いか。

(6) 新たな議論の方向性については、個別の論者においては見られるものの、本共同研究全体の観点からいえば、共有できる枠組みや「水路」のようなものは生み出せたかどうかは疑問である。但し、次の如き共通理解は得られたものと考えている。

近代日本の宗教とナショナリズム という重要課題を考える上で、なにより当時の「国家理念」の探究が肝要であり、「神道」と「国体論」が交錯する問題群について史料に基づき個別具体的に検討することの重要性とその戦略的有效性が相互に確認出来たこと。

多種多様な「国体論」の中でも、とりわけ「神道的国体論」の個別的、全体的検討の必要性、重要性が共有されたこと。

従前、当該テーマについては、専ら「政教関係」や「近代天皇制イデオロギー」という観点から、ともすれば各論者の思想・信条の表白を伴う形で考察されることが多く、先鋭な対立や擦れ違いが生じるのみの非生産的議論に陥りがちであった。しかし、今後はあくまでアクチュアルな価値判断の前提としての「史実」を時空両面から比較する視座、要するに個別具体的な実証的歴史研究の積み重ねと包括的比較を通して、その共通点(一般性)と差異(特殊性)を慎重に見出すことにより、分野横断的・国際的に共通出来る普遍的・一般的な議論の土台構築が必要、との認識が共有されたこと。

(7) 平成29年12月16、17日には、第4回宗教とナショナリズム研究会(総括研究会)「国家神道と国体論に関する学際的研究宗教とナショナリズムをめぐる「知」の再検討」を國學院大學たまプラーザキャンパスで開催した。そして総括研究会における発表を踏まえ、学際的研究成果の纏めとして本共同研究の成果報告書(全365頁)を作成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 41 件)

藤田大誠、『国体論史』と清原貞雄に関する基礎的考察、國學院大學研究開発推進センター研究紀要、第 12 号、査読無、1 - 128
藤田大誠、國學院大學における建学の精神「神道精神」の基礎的考察、國學院大學校史・学術資産研究、第 10 号、査読無、2018、31 - 86
藤田大誠、明治神宮外苑拡張構想と幻の東京オリンピック、國學院大學人間開発学研究、第 9 号、査読有、2018、47 - 62
藤本頼生、宗教法人の成立と立法主義にかかる一考察 認証制の解釈と戦後の神社法論議をめぐって、國學院大學研究開発推進センター紀要、第 12 号、査読無、2018、129 - 158
Koji Suga, book review on Helen Hardacre, Shinto: A History, Religious Studies in Japan, vol. 4, 査読無, 2018, 119 - 124, <http://jpars.org/online/wp-content/uploads/2018/03/RSJ-vol4-09-SUGA.pdf>
寺田喜朗、戦後の新宗教運動と教導システム、本化仏教研究所所報、第 1 号、査読無、2018、31 - 69
柏木亨介、全国療養所神社参拝記 栗生神社・物吉神社・鈴蘭神社、高原、2018、54 - 57
河村忠伸、神社神道における祭神の基本理解 「帝国の神祇」と「祭神変更」、國學院大學研究開発推進センター紀要、第 12 号、査読無、2018、249 - 276
高野裕基、「戦時下」における皇典講究所・國學院大學の研究・発信、國學院大學校史・学術資産研究、第 10 号、査読無、2018、87 - 111
藤田大誠、〔書評〕橋本富太郎著『廣池千九郎 道徳科学とは何ぞや』、國學院雑誌、第 108 巻第 12 号、査読無、2017、38 - 42
藤田大誠、〔書評と紹介〕江島尚俊・三浦周・松野智章編『戦時日本の大学と宗教』、宗教研究、第 91 巻第 2 輯、査読無、2017、281 - 288
藤田大誠、靖國神社の祭神合祀に関する一考察 人霊祭祀の展開と「賊軍」合祀問題を軸として、國學院大學研究開発推進センター研究紀要、第 11 号、査読無、2017、1 - 90
藤田大誠、昭和初年における明治神宮体育大会の歴史的意義 学生参加問題と昭和天皇行幸を軸として、國學院大學人間開発学研究、第 8 号、査読有、2018、55 - 69
藤本頼生、〔書評と紹介〕磯前順一・川村覚文編『他者論的転回 宗教と公共空間』、宗教研究、第 388 号、査読無、2017、171 - 175
藤本頼生、『古事記』神名表記の社会的受容と神社考証における現代的課題、古事記

学、第 3 号、査読無、2017、217 - 240
藤本頼生、現行皇室典範の制定と「皇位の世襲」について、神道宗教、第 245 号、査読有、2017、1 - 19
萱浩二、〔書評とリプライ〕大澤広嗣著『戦時下の日本仏教と南方地域』、宗教と社会、第 23 号、査読無、2017、119 - 122
畔上直樹、南方熊楠と『現場からの声』、地域からみた神社合祀反対運動、BIO CITY、第 70 号、査読無、2017、90 - 97
寺田喜朗、日本会議と創価学会 安倍政権を支えるコミュニティ、現代宗教二〇一七、査読無、2017、101 - 125
河村忠伸、秋葉山修験と叶坊(加納坊)光幡、山岳修験、第 59 号、査読有、2017、19 - 37
⑲高野裕基、〔書評〕河村忠伸著『近現代神道の法制的研究』、神道宗教、第 247 号、2017、87 - 90
⑳高野裕基、皇典講究所・國學院大學の「神道」研究と道義学科、國學院大學研究開発推進機構紀要、第 9 号、査読有、2017、91 - 112
㉑高野裕基、第一次宗教法案と明治二十年代の宗教争議 「都筑馨六文書」を中心に、神道宗教、第 245 号、査読有、2017、21 - 42
㉒藤田大誠、国学的教育機関に関する基礎的考察 「近代国学と教育」の視座から、國學院大學人間開発学研究、第 7 号、査読有、63 - 76、https://k-aiser.kokugakuin.ac.jp/webopac/ningenkaihatsu_07_10._?key=WHP0WP
㉓藤田大誠、戦時下の戦歿者慰霊・追悼・顕彰と神仏関係 神仏抗争前夜における通奏低音としての英霊公葬問題、國學院大學研究開発推進センター研究紀要、第 10 号、査読無、2016、1 - 39
㉔小島伸之、〔書評とリプライ〕藤田大誠・青井哲人・畔上直樹・今泉宜子編『明治神宮以前・以後 近代日本をめぐる環境形成の構造転換』、宗教と社会、第 22 号、査読無、2016、106 - 110
㉕昆野伸幸、〔書評〕國學院大學研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集『昭和前期の神道と社会』、明治聖徳記念学会紀要、復刊第 53 号、査読無、2016、247 - 255
㉖藤本頼生、「ムラの護國神社」再考、神道文化、第 28 号、査読無、2016、61 - 73
㉗萱浩二、〔書評と紹介〕青野正明著『帝国神道の形成』、宗教研究、第 90 巻第 1 輯、査読無、2016、139 - 145
㉘齋藤智朗、〔書評と紹介〕三宅守常著『三条教則と教育勅語』、『宗教研究』第 90 巻第 2 輯、査読無、2016、220 - 226
㉙畔上直樹、戦争末期の無格社整理政策と上越地方、地方史研究、第 383 号、査読有、2016、43 - 46
㉚Yoshiro Terada, Views on the Pursuit of Happiness in Japanese New Religions: The

Vitalistic Conception of Salvation and Systems of Instruction, Religious Studies in Japan, vol.3, 査読無, 2016, 41-65

- ③③寺田喜朗、姉崎正治の日蓮論 明治期アカデミシヤンの日蓮イメージ、中央学術研究所紀要、第44号、査読無、2016、19-38
- ③④小川原正道、明治三十八-三十九年東北大飢饉と仏教 『中外日報』をめぐって、法学研究、第89巻第6号、査読無、2016、85-95
- ③⑤小川原正道、満州国と「合祀」 建国忠霊廟の創建と宣伝、仏教文学、第41号、査読無、2016、75-86
- ③⑥井上兼一、一九三〇年代における初等教育の教科課程改造 教育審議会における「幹事試案」の構造の再検討、『皇學館大学教育学部研究報告集』第8号、査読無、2016、61-87
- ③⑦金子宗徳、里見岸雄における八紘一宇、国体文化、第1100号、査読無、2016、4-13
- ③⑧河村忠伸、御祭神に関する神社制度 別格官幣社配祀神 殉難戦没之将士を例として、國學院大學研究開発推進センター研究紀要、第10号、査読無、2016、41-70
- ③⑨西田彰一、一九〇〇年代における筧克彦の思想、日本研究、第53号、査読有、2016、253-266
- ④⑩小島伸之、〔書評〕書評 前川理子著『近代日本の宗教論と国家 宗教学の思想と国民教育の交錯』、図書新聞、第3229号、査読無、2015、3
- ④⑪平山昇、〔書評論文〕藤田大誠・青井哲人・畔上直樹・今泉宜子編『明治神宮以前・以後 近代神社をめぐる環境形成の構造転換』、神園、第14号、査読無、2015、18-37

〔学会発表〕(計15件)

藤田大誠、『国体論史』編述者・清原貞雄の国体論、日本思想史学会 2017 年度大会研究発表、2017

藤田大誠、明治神宮外苑拡張構想と幻の東京五輪、明治神宮国際神道文化研究所公開学術シンポジウム「帝国日本のスポーツと明治神宮 幻の東京オリンピック前後」、2017

江頭慶宣、藤田大誠、宮本誉土、山田茂人、乙黒洋、浅山雅司、松本丘、阪本是丸、人霊祭祀、顕彰と継承と、第35回神社本庁神道教学研究大会、2017

藤田大誠、近代国学と国史学 皇典講究所・國學院大學を軸として、公開シンポジウム「史学科の比較史：草創期から一九四五年」、2017

小島伸之、寺田喜朗、藤田大誠、高橋典史、平山昇、国体明徴運動下の社会と宗教 昭和10年前後を中心に、日本宗教学会第76回学術大会パネル発表、2017

山口輝臣、藤田大誠、昆野伸幸、須賀博志、谷川穰、苅部直、戦後史のなかの「国家神道」、史学会第百十五回大会・日本史部会・近現代史部会シンポジウム、2017

齋藤智朗、小島伸之、永岡崇、中山郁、河村忠伸、宮本誉土、昭和戦中期の行政と宗教・神社、神道宗教学会第71回学術大会、2017

畔上直樹、戦前期「鎮守の森」論からみた現代神道環境主義、2017年度日本宗教史懇話会サマーセミナー、2017

田中悟、国家による動員と神道との関係について、日本宗教学会第75回学術大会、2017

藤田大誠、「明治神宮体育大会」の歴史的意義に関する一考察、スポーツ史学会 30周年記念大会、2016

藤田大誠、教学刷新体制下の国体論と神道・国学、教育史学会第60回大会、2016

藤田大誠、戦時下の日本主義と神仏観 松永材を中心に、日本宗教学会第75回学術大会、2016

藤田大誠、畔上直樹、昆野伸幸、菅浩二、田中悟、小島伸之、「近代日本社会における神道と国体論 宗教とナショナリズムをめぐる一断面」、『宗教と社会』学会第24回学術大会テーマセッション、2016

藤田大誠、「明治神宮体育大会」再考、体育史学会第5回学会大会、2016

昆野伸幸、戦時期の国体論を再考する、グローバル日本研究クラスター国際ワークショップ「日本研究の現在 思想史の立場から」、2016

平山昇、高木博志、永江雅和、ジョルダン・サンド、畔上直樹、明治神宮の「受容」と帝国日本 帝都・聖地・ツーリズム、明治神宮国際神道文化研究所公開学術シンポジウム、2016

西田彰一、大正後期から昭和初期にかけての明治天皇の顕彰運動について 五箇条の御誓文顕彰碑「誓の御柱」建設運動を中心に、大阪歴史学会大会個人報告、2016

〔図書〕(計7件)

藤田大誠編、「国家神道と国体論に関する学際的研究 宗教とナショナリズムをめぐる「知」の再検討」研究成果報告書、2018、365

②藤田大誠、大阪国学院史 創立百三十五年・通信教育部開設四十年、一般財団法人大阪国学院、2017、360

河村忠伸、近現代神道の法制的研究、弘文堂、2017、354

國學院大學研究開発推進センター編(阪本是丸責任編集)(藤田大誠、小島伸之、藤本頼生、菅浩二、齋藤智朗、宮本誉土、畔上直樹、河村忠伸、高野裕基執筆) 昭和前期における神道と社会、弘文堂、2016、657

編集委員：齋藤智朗、藤田大誠、藤本頼生、

(菅浩二、宮本誉士執筆)神社新報創刊七十周年記念出版 戦後神道界の群像、神社新報社、2016、679
寺田喜朗・川又俊則・塚田穂高・小島伸之編、近現代日本の宗教変動、ハーベスト社、2016、410
平山昇、初詣の社会史 鉄道が生んだ娯楽とナショナルリズム、東京大学出版会、2015、313

〔その他〕

ホームページ

<http://shintotokokutai.hatenablog.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 大誠 (FUJITA, Hiromasa)
國學院大學・人間開発学部・教授
研究者番号：20407175

(2) 研究分担者

小島 伸之 (KOJIMA, Nobuyuki)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：00449258

山口 輝臣 (YAMAGUCHI, Teruomi)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：20314974

昆野 伸幸 (KONNO Nobuyuki)
神戸大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：00374869

(3) 連携研究者

藤本 頼生 (FUJIMOTO Yorio)
國學院大學・神道文化学部・准教授
研究者番号：30612163

菅 浩二 (SUGA Kouji)
國學院大學・神道文化学部・准教授
研究者番号：30532676

齊藤 智朗 (SAITO Tomoo)
國學院大學・神道文化学部・教授
研究者番号：30407176

宮本 誉士 (MIYAMOTO Takashi)
國學院大學・研究開発推進機構・准教授
研究者番号：60601200

塚田 穂高 (TSUKADA Hodaka)
國學院大學・神道文化学部・兼任講師
研究者番号：40585395

畔上 直樹 (AZEGAMI Naoki)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：20315740

青井 哲人 (AOI Akihito)
明治大学・理工学部・准教授
研究者番号：20278857

寺田 喜朗 (TERADA Yoshirō)
大正大学・文学部・教授
研究者番号：40459839

高橋 典史 (TAKAHASHI Norifumi)
東洋大学・社会学部・准教授
研究者番号：50633517

小川原正道 (OGAWARA Masamichi)
慶應義塾大学・法学部・教授
研究者番号：40352637

井上 兼一 (INOUE Kenichi)
皇學館大学・教育学部・准教授
研究者番号：10440645

田中 悟 (TANAKA Satoru)
摂南大学・外国語学部・准教授
研究者番号：90526055

平山 昇 (HIRAYAMA Noboru)
九州産業大学・商学部・准教授
研究者番号：20708135

(4) 研究協力者

今泉 宜子 (IMAIZUMI Yoshiko)
明治神宮・国際神道文化研究所・主任研究員

柏木 亨介 (KASHIWAGI Kyosuke)
重監房資料館・学芸員

北浦 康孝 (KITAURA Yasutaka)
早稲田大学・大学史資料センター・非常勤嘱託

金子 宗徳 (KANEKO Munenori)
里見日本文化化学研究所・所長、亜細亜大学・非常勤講師

河村 忠伸 (KAWAMURA Tadanobu)
秋葉山秋葉神社・権禰宜、國學院大學・研究開発推進機構・共同研究員

福島 幸宏 (FUKUSHIMA Yukihiro)
京都府立図書館

高野 裕基 (TAKANO Yuki)
國學院大學・研究開発推進機構・助教

西田 彰一 (NISHIDA Shoichi)
国際日本文化研究センター技術補佐員